

## 私の青春

故 全 鎮植(ジョンジンシク) 第7期

この稿が活字になって世に出るまで私の生命がもつかどうかは分からない。もっとも私は今むずかしい病気持ちだから言うことだが、考えてみると人の運命はみな同じと言えることだ。

この記念誌にも千歳の青春を語る多くのエピソードが寄せられることだろう。だが誰にでも必ずしもいいことづくめの思い出ばかりではないだろう。ましてや私のように晴舞台の全国大会を前に、或る日突然に退部を申し出た者にとっては。

暑い夏のつらい練習、端からはゴク潰しだの気狂いだのと後指をさされながらの部活。いよいよシーズン到来と夏合宿(といっても菅平や山中湖ではない、学校のグラウンドだ)の最後の日、グラウンドに座りこみ、まさにキャプテン吉田伸一先輩のシメの話が終わろうとした時、その円陣の中から私の手がいつもと違って少し遠慮がちに上がった。「キャプテン、ボク今日でラグビー部やめます。」「いや、やめさせて下さい。」そう言って下を向いた。

泣かない男はその名の通り、こみあげる涙をぐっとこらえて胃袋に流しこんだ。顔の表情からは何も感じとれない。全員の瞳が私を見ている。しばらく間を置いて吉田さんは、「分かった。後で話を聞く。」早や太陽は西に傾き、初秋を感じさせる微風と共に夕暮れの匂いであった。吉田さん、若林さん、角田さんが残り、私の話を聞いてくれた。例の如く若林さんが座のリーダーシップをとり、角田さんは黙々とグラウンドをほじくり、地球の裏側のブラジルかアルゼンチンを目指している。

先輩曰く、地球は丸いからここで掘り進んでいくと、彼の地の女性たちのスカートが下から見えるんだと。いや見えるはずだと。ヌードどころかキスの場面も世にはなかった時代の若者たちの、この如何にも健康そのもののギャグの時代。しかしその時代、私は己の人生の生きざまを決めた。旧制中学からそのまま上がってきたので、まだ高校という感覚の出ない新制高校の一年生である。敗戦後の日本も大変であったが、その中で生きる道を探す朝鮮人、故郷に帰るべくして尚帰ることの出さない在日朝鮮人の運動は、心ある若者たちの使命感をかき立てたのである。笑ってはいけない。スポーツはおろか、学業すら捨てて、チェゲバラのような革命家になろうと決心したのだ。やっぱり笑ってくれるか。

ラグビー部の活動に目をそむけ耳をふさぐようになった私は、間もなく定時制に籍を移し、いつも窓から練習を見ることになる。そしてたまには登校の道すがら盟友たちともすれ違う。その時どんな心境だったか今思い出してもよく分からない。しかしいつも涙は胃袋に流していたに違いない。今でも私の青春はラグビーなのだ。